

一次の文章は、有川浩『明日の子供たち』の一節です。三田村慎平は児童養護施設『あしたの家』の児童指導職員として働き始めました。和泉和恵は同僚の職員です。以下の文章を読んで、後の問に答えなさい。

奏子は三田村を無視しているわけではないし、態度が悪いわけでもない。むしろ、表面的には愛想よく接しているくらいだ。

ただ、慎平ちゃんとは呼ばないだけで。

——それだけなんだからいいじゃないか。一体何がきっかけで壁を作られているのか分からないが、九十人すべての子供たちに好かれるなんてことは不可能だろうし、その合わない子供が奏子になったというだけだ。

愛想よく他人行儀な奏子のことが心の隅に引っかかることを除いたら、仕事は概ね順調だった。日報の書き方も分かってくる、和泉を残業に付き合わせてしまうことも少なくなった。

子供たちの小さな洋服を畳むのも慣れてきた。

「じゃあ、わたし女子の洗濯物戻してくるから」

言いつつ和泉が、女子の洗濯物を詰めた洗濯籠を提げて立ち上がった。

「男子のほうはよろしくね」

男子の洗濯物を戻すとき、和泉は三田村に付き添わなくなった。誤配が減ったからだ。たったそれだけのことだが、少しは認めてもらえたようで無性に嬉しい。

「任せてください！」

和泉を見送ってから男子の洗濯物を籠に詰め、三田村も多目的室を出た。廊下を歩いてみると、

「慎平ちゃん」

声をかけてきたのは平田久志、通称ヒサである。もう普段着に着替えている。

「おー、お帰り」

「チビどもの洗濯物？ 俺も手伝うよ」

「大丈夫だよ、一人で」

「よかった、違うって言うてくれる人で」

2すつと背筋が冷たくなった。——この感覚を、もう知っている。『あしたの家』にきた初日だ。

無邪気に人懐こく三田村を囲んでいるように見えた子供たちを、和泉が「試してるのよ」と——子供たちは無邪気をaヨソオって、新顔の三田村が敵か味方が量っていた。

今は久志が量ったわけではなく、量られるような方向へ三田村が踏み込んだ。

意固地になって返す言葉を間違えていたら、決して味方の箱にはもう入れてもらえなかったのだろう。

「家じゃないけど、俺たちにとっては生活の場所なんだ」

「……ごめん」

呟くと、久志が笑った。

「こういうときごめんって言うっちゃう慎平ちゃんが俺はけっこう好きだけど、カナは怒るかもしれないな」

「……じゃあ、何て言えばいいんだよ」

「『分かった』くらいなら気に入るんじゃないかな」

「何か、素っ気ないような気がするけど」

「でも、それくらいが妥当なんだよ。きつとね」

久志の笑顔に無理をしている様子はない。しかし——

自分たちの境遇に妥当という言葉を使ってしまうことが悲しい。そう思

ってしまうことも、妥当ではないのだろうか。

「何で心配してくれるの、俺のこと」

「慎平ちゃんの心配は割くらいかな」

Aの顔に出たのだろう、久志は「ごめんね」と笑った。

「家じゃないけど、生活の場所だからさ。嫌いな人は一人でも少ないほうが気分良く暮らせるでしょ」

そうか、と瞬に落ちた。久志は奏子のことを心配しているのだ。

「仲いいんだな」

まあね、と久志も否定はしない。

大丈夫、の部分を誘示したものの、久志は「まあまあ」と二つ提げた洗濯籠の一つを取り上げた。

配達先の部屋には子供たちが不在だった。宿題で学習室にでも行っているだろう。子供たちがいないときは、筆筒の中に洗濯物をしまつてやることになっている。

三田村が洗濯物をしまい始めると、久志も做った。特に「これ、誰の？」などとは訊かれない。奏子と並んで「問題のない子供」の代表格である久志は、小学生たちの面倒も見慣れている。(略)

1 全員の洗濯物を片付けて、二つの空いた洗濯籠は三田村が持った。

「ありがとな」

「ううん。ところでさ」

先に部屋を出ながら、久志はごく何気ない口調で口を開いた。

「カナのこと、どうするの？」

部屋から一步踏み出したところで三田村は固まった。何気ない口調で、三田村にとっては爆弾だった。

「……どうするって」

何気なく返そうとして声がかすれた。

「このままでいいのかってこと」

淀みない受け答えに、今度こそ言葉に詰まった。久志のほうが一枚上手だ。

「……別に、特にこじれてるわけじゃないし」

ようやく押し出した言葉は、まるでバツの悪いところを見つけた子供だ。久志も「またまた」と一蹴した。

「こじれてるわけじゃないけど、壁作られてるの分かってるでしょ」

「そんなのっ……」

相手は十七歳の高校生だ。こちらは十歳近く上の二十六歳だ。だが、年の差なんか空しく吹き飛んだ。

「どこの会社だつて全員と上手く行くわけじゃないんだから、仕方ないだろう」

「慎平ちゃんにとっては『あしたの家』って会社なんだ？」

からかうような口調は、むしろ論すようにも響いた。

「違っ……」

「小さい頃から一緒だし、話も合うし」(略)

「……でも、カナちゃんはもう俺とあまり話したくないんじゃないかな」

「まあ、そうだね」

あつさり言い放されて**B**なくなった。

でも、壁作られてさっさと諦めるくらいなら、そもそもここに来なきゃよかったんじゃない？」

声に少し陰が混じった。あつと思つて顔を上げると、久志は「じゃあね」と自室のほうへ廊下を歩き出した。

呼び止めようとした声が喉の奥で萎む。

呆れさせたのか苛立たせたのか、最後の表情は見定めることができなかった。

夕食の立ち会いを終えて、職員室に戻る途中のことだった。

bゴラク室の前を通りがかると、入り口の近くのソファに奏子と和泉が座っているのが見えた。

別のルートで戻ろうかと一瞬弱気が閃いて、いやいや別に避けることはないと思ひ直し、だが微妙に二人の死角に回り込みながらそおと通り過ぎる。

すると、自分の名前が耳に飛び込んできた。

「三田村先生のことだけど」と切り出していたのは和泉だ。

とつさに壁に貼り付き、聞き耳を立てる。

「カナちゃん、どうして素っ気ないの？」

素っ気なくされていることに和泉も気づいていたのだ、ということにまず打ちのめされた。(略)

「もう副担当の先生なんだよ。もしわたしに何かあったら、三田村先生が繰り上げて担当になるんだよ。わたしは、カナちゃんがここで息苦しくなったら悲しい」

「気が合わない人ってどうしてもいるじゃない」

「決めつけるのは早いと思うよ。三田村先生、まだ来たばかりでしょ」

いたたまれなくなつて、足早にその場を離れた。最後はとうとう小走りに

なったが、まわりつく不甲斐なさは振り切れない。

自分は副担当だから、奏子と多少気が合わなくても大丈夫だと思っていた。どうせ奏子は和泉に懐いているのだし、自分が直接相手をすることはそんなにないだろうと高を括っていた。

自分の気まずさをくよくよ気にかけ、自分が奏子との気まずさに目をつぶればいいのだと、それが大人の分別だと、単なる逃げ腰を正当化して。もし和泉に何かあったら、なんて全然考えていなかった。

ある日突然ばきりと折れて辞める人は多いと猪俣も言っていたのに。事故や病気でリタイヤすることもああるし、家庭の事情で辞めざるを得なくなることもあってあるだろう。

そんな折にも、自分が気まずさに目をつぶれば済むと逃げ腰でいるつもりだったのか。

ここが **X** である奏子の息苦しさにも目をつぶって。

「……ちくしょう」

吐き捨てたのは、自分自身に対してだった。

中学生が消灯して、高校生だけのささやかな **c** ヨフかしの時間がやってきた。

三田村が奏子と杏里の部屋に行くと、いたのは携帯をいじっている杏里だけだった。(略)

屋上に続く階段へ向かうと、果たして低い話し声が聞こえてきた。久志と奏子の声だ。

踊り場の下でしばらく立ち尽くした。決意と弱気がせめぎ合う。二人が何を話しているのか、遠くて聞き取れない声に聞き耳を立ててしまう。

3 ——— いいから踏み出せ！

心で叫んだ言葉の終いが強い息になって漏れた。

二人を見上げる踊り場に、それこそ躍り出る。

二人は階段のてっぺんに並んで座っていて、久志が先にこちらを向いた。

一瞬その目を意外そうにしばたたき、それから眼差しが笑みを含む。

奏子は遅れてこちらに目を向け、三田村を認めた途端に眼差しが陰を含ん

かれ、ずばりと指摘されたから。

イ 年下の久志がはるかに物事を深く考えていて、敵か味方かを確かめるべく誘導していることに気付いたから。

ウ 『あしたの家』が奏子や久志にとってはおかけがえのない場所である、という認識をもっていなかったことを久志に馬鹿にされたから。

エ あくまでも働いたために『あしたの家』にいると久志に思われてしまうと、この先ずっと信用を得られなかっただろう、と思ったから。

問4 **A**・**B** に最もふさわしいことを本文中より三文字以上五文字以内で書き答えなさい。

A ア むだ骨を折った **イ** 拍子抜けした **ウ** 空回りした

エ 後手に回った **オ** しりごみした

B ア 口火を切れ **イ** 重い口を開け **ウ** 雄弁をふるえ

エ 話に水をさせ **オ** 二の句が継げ

問5 **X** に最もふさわしいことを本文中より三文字以上五文字以内で書き答えなさい。

問6 傍線部 **3** 「——いいから踏み出せ！」とありますが、この時の三田村の気持ちはどのようなものですか。本文中のこのばを用いて、四十五字以上五十字以内で説明しなさい。

問7 傍線部 **3** 以降の奏子と久志の気持ちとしてふさわしいものを二つ選び、記号で答えなさい。

A 普段から関わりたくないと思っている三田村がやって来たので、奏子は不愉快になっている。

イ 久志は三田村を敵だと思っていたので、わざわざ自分と奏子を探してや

だ。——怯むな。

「カナちゃん。俺、話したいことがあるんだけど」

「何ですか？」

「多分、俺、カナちゃんと行き違っちゃってるよね」

「気のせいじゃないですか？」

奏子が立ち上がったて階段を下りようとしたその前に、両手を広げて立ち塞がる。

「気のせいじゃないよね。ちゃんと話そうよ」

(有川浩『明日の子供たち』〔幻冬舎〕より)

問1 傍線部 **a**・**c** のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 傍線部 **1** 「全員の洗濯物を片付けて、二つの空いた洗濯籠は三田村が持った」とありますが、ここまでの三田村の様子として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

A 指示に従わない奏子に注意できなかったことをバネに、さらなる成長を決意している。

イ 仕事を教えてくれることに感謝しつつも、心の底では自分を信じない和泉に壁を作っている。

ウ 一人前の職員となるには依然として課題はあるが、徐々に仕事にも慣れ、自らの成長を感じている。

エ 久志の方が子供たちの世話に慣れているので、どうしても前向きに仕事をするのができないでいる。

問3 傍線部 **2** 「すつと背筋が冷たくなった」とありますが、三田村がこのような気持ちになったのはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

A 奏子とこじれてしまった仲を改善するのをもう諦めたことを久志に見抜

つて来たことに驚いている。

ウ 奏子が壁を作っていることにもかまわず、三田村が奏子と話をしようとしていることを、久志は内心で応援している。

エ 奏子は久志と二人きりであるところをよりによって三田村に見つかってしまったので、一刻も早くこの場を立ち去りたくなっている。

オ せつかく奏子と会うために三田村はやって来たのに、どうせ奏子にはぐらかされて逃げられるのを、久志はかわいそうに思っている。

二次の文章は、ジャーナリストの森達也さんが書いたものです。これを読んで、後の問に答えなさい。ただし **□** で囲んだ箇所は設問の関係上、文章を入れ替えています。

「森さんはヤラセをやったことはありますか？」と時おり訊ねられる。そんなとき僕は、その質問をした人が、どんな意味でヤラセという言葉を使ったのかを訊き返すようにしている。

事実になんか捏造する。これがヤラセだ。その多くには、みんなから注目されるとか評判になるとか見返りがある。ただしここまで読んでくれたなら、その判定は実は簡単ではないことは、あなたもわかってくれると思う。事実は確かにある。でもその事実をそのまま皿に載せても食べづらい。という皿に載らない。だからみんなが喜んで食べてくれるように調理をする。切り刻む。余分だと思えば捨てる。これが演出だ。

ヤラセと演出のあいだには、とても曖昧で微妙な領域がある。そんなに単純な問題じゃない。でも報道したりドキュメンタリーを撮ったりする側についてひとだけ言えることは、自分が現場で感じとった真実は、絶対に曲げてはならないということだ。そして同時に、この真実はあくまでも自分の真実なのだ意識することも大切だ。同じ現場にいたとしても、感じることは人によって違う。

つまり胸を張らないこと。負い目を持つこと。

メディアやジャーナリズムにおいては、これがとても重要だと僕は考える。自分は決して客観的な事実など伝えていない。自分が伝えられることは、結

局のところは主観的な真実なのだ。そう自覚すること。そこから出発すること。だからこそ自分が現場で感じたことを安易に曲げたり変えたりすり替えたりしないこと。

たった一つの真実を追究します。

こんな台詞を口にするメディア関係者がもしいたら、あまりその人の言うことは信用しないほうがいい。確かに台詞としてはとても格好いい。でもこの人は決定的な間違いをおかしている。そして自分がその間違いをおかしていることに気づいていない。

1 真実はひとつじゃない。事実には確かに一つ。ここに誰かがいる。誰かが何かを言う。その言葉を聞いた誰かが何かをする。たとえばここまででは事実。でもこの事実も、どこから見るかで全然違う。つまり視点。なぜなら事実は、限りなく多面体なのだから。

あなたのクラスの授業。カメラをどこに置くかで見えるものはまったく違う。先生の立っている場所にカメラを置く場合と、クラスの問題児の席のすぐ傍にカメラを置く場合とで、世界はまったく変わる。世界は無限に多面体だ。

①ここで場面は変わる。今度は群れから離れてしまったトムソングゼル
のドキュメンタリーだ。干ばつで草がほとんどない。母親と生まれたばかりのトムソングゼルは、サバンナを長くさまよいながら、必死に草を探し求める。やっと草を見つけた。2匹は無心に草を食べる。その時力メラのレンズが、遠くからじりじりと近づいてくる痩せ細った雌ライオンの姿を捉える。その視線は明らかに、子供のトムソングゼルを狙っている。

②このままでは家族全員が餓死してしまう。母ライオンは今日も、弱った足を引きずりながら狩りに出る。もしも今日も獲物を発見できなかったら、子供たちはみんな死んでしまうかもしれない。そのとき母ライオンは2匹のトムソングゼルを発見した。大きなほうは無理でも小さなほう

ひとつだけが正解であとは全部間違っているということはないんじゃないかな。3 事件や現象は、いろんな要素が複雑にからみあってできている。どこから見るかで全然違う。

さまざまな角度の鏡を貼り合わせてできているミラーボールは、複雑な多面体によって構成される事実と喩えることができる。でもこれを正確にありのままに伝えることなどできない。だからメディアは、どれか一点の視点から報道する。それは現場に行った記者やディレクターにしてみれば、事実ではないけれど（自分の）真実なのだ。

視点を変えれば、また違う世界が現れる。視点は人それぞれで違う。だから本当は、もつというんな角度からの視点をメディアは呈示するべきなのだよ、提示されるはずなのだ。

でも不思議なことに、ある事件や現象に対して、メディアの論調は横並びにとでも似てしまう。なぜならその視点が、最も視聴者や読者に支持されるからだ。

だからあなたに覚えてほしい。事実は限りなく多面体であること。メディアが提供する断面は、あくまでもそのひとつでしかないということ。もしも自分が現場に行ったなら、全然違う世界が現れる可能性はとても高いということ。

自分が現場で感じた視点に対して、記者やディレクターは、絶対に誠実であるべきだ。なぜならそれが、彼が知ることができる唯一の真実なのだから。4 でも現実はそのじゃない。

（略）切り上げと切り下げの話思い出してほしい。現実はとても微妙だ。取
えて数値化すれば、小数点以下の数字ばかりになる。それではわかりづらい。
だから四捨五入する。1.5以上は2.0。1.4は1.0。

切り上げや切り下げは、メディアの宿命でもある。だからそれが一定
のルール、つまり四捨五入の法則にきちんと従っているのなら、見方を変え
ればそれほど悪質ではないといえるかもしれない。

ところが実のところ、7.6でも7にしてしまう場合がある。あるいは、5.3で

ならば、弱った自分の足でも捕まえることができるかもしれない。

③動物のドキュメンタリーを例に挙げよう。アフリカのサバンナで、子供を3匹産んだばかりの母ライオンがいる。ところがその年のアフリカは記録的な干ばつに襲われていて、ライオンのエサである草食動物がとても少ない。だから母ライオンは満足に狩りをする事ができない。飢えてい
る。痩せ細ってお乳も出ない。子ライオンたちもぐったりと衰弱して、もうほとんど動けない。

④この場面を観ながら、あなたはきっと、早く逃げろと思うはずだ。早く
気がついてくれ。今なら間に合う。あの凶暴なライオンから逃げてく
れ。

⑤母ライオンはじりじりと、2匹のトムソングゼルにじり寄ってゆく。
その場面を観ながらあなたは、何を思うだろう。きっと手に汗握りなが
ら、がんばれと思うはずだ。がんばってあのトムソングゼルを仕留めて、
巣で待つ3匹の子ライオンにお乳を飲ませてやってくれ。命を救ってく
れ。

これが視点だ。どちらも嘘ではない。でも視点をどこに置くかで、世界は
これほどに違って見える。

2 物事にはいろんな側面がある。どこから見るかでまったく変わる。あな
たは普段、父親や母親の言いつけをよく守る子供であるとする。でも今日夕
ご飯を食べながら、「最近あまり勉強してないんじゃない？」と母親に言
われて、思わず口答えをしてしまったとする。このときの口答えの理由は何
だろう。

ある人は、「あの子は最近お母さんが口うるさいと思っていらしいとい
たんだよ」と言う。また別の人は、「自分ではやっているつもりだったから、
お母さんはわかってないと思ったんだ」と言う。またもう一人の人は、「実
は最近、自分でも確かに勉強時間が足りないと思っていたので、うい反抗し
てしまったんだよ」と言う。「別の心配事があってそれが気になっていて、
思わず口答えしてしまったのさ」と説明する人もいるかもしれない。

あなたの本当の心情は僕にはわからないけれど、でも少なくとも、どれか

も6にしてしまう場合がある。とても強引な切り上げや切り下げだ。

この場合、見ているほうは、もちろんもとの数字はわからない。間違った
数字が集積されれば、間違ったイメージや世界観が作られる。しかもテレビ
の場合、見る人の数は圧倒的に多い。その影響力は凄まじい。こうして民
意という多数派が作られる。政治もこの民意には敵わない。なぜなら民意を
敵に回すと、政治家は次の選挙で落選するかもしれないからだ。こうして国
の方針が決まる。間違った世界観で作られた方針だ。でも誰も間違っている
とは気づかない。気づくのは、いつも事が終わってからだ。かつてのドイツ
のように。かつてのこの国のように。（略）

なぜ四捨五入の法則が働かないときがあるのだろう。政治家やスポンサー
からの圧力の場合もある。抗議を恐れるときもある。でも最大の理由は、無
理な切り上げや切り下げをしたほうが、視聴率や部数が増える場合があるか
らだ。これを5 市場原理という。

例えば冷夏で野菜がたくさん作れないときは、野菜の値段が上がる。つま
りキャベツ一個の価値は決して絶対的なものではなく、市場（マーケット）
がどれほどにキャベツを求めるかで決まる。

だから考えてほしい。その市場原理を作っている要素は何なのか。

X

（略）僕たちはメディアから情報を受け取る。そして世界観を作る。でもそ
のメディアの情報に、大きな影響力を与えているのも僕たちだ。メディアが
何でもかんでも四捨五入してしまうのも、その四捨五入がときには歪むのも、
実際の物事を誇張するのも、ときには隠してしまうのも、（すべてとは言わ
ないけれど）僕たち一人ひとりの無意識な欲望や、すっきりしたいという
衝動や、誰か答えを教えてくださいという願望に、忠実に応えようとしている
からなのだ。

（森達也『たったひとつの「真実」なんてない』〔筑摩書房〕より）

問1 傍線部1「真実はひとつじゃない。事実は確かに一つ」とありますが、筆者はこの文章で「事実」と「真実」をどのようなものとしてとらえていますか。それを説明した次の文のA・Bに当てはまる対照的なことを本文中よりそれぞれ探し、書き抜きなさい。

事実とはAなものであり、真実とはBなものであるととらえている。

問2 傍線部2「物事にはいろんな側面がある」とありますが、ここから「事実」とはどのようなものであると筆者は考えていますか。最もふさわしいことを本文中より五字以内で探し、書き抜きなさい。

問3 本文中の段落①から⑤を、正しい順番に並べ替えなさい。

問4 傍線部3「事件や現象は、いろんな要素が複雑にからみあつてできている」とありますが、そういった「事件や現象」を報道する際、メディアを担う人々が現場で意識するべきことは何ですか。解答欄のP・Qに当てはまることを、それぞれ十字以上十五字以内で答えなさい。ただし必ずどちらにも次のことばを用いなさい。

視点

問5 傍線部4「でも現実はそのじゃない」とありますが、記者やディレクターが「そうじゃない」態度を取った結果、メディア全体はどのような傾向になっていますか。それが書かれている一文を傍線部4より前から探し、その最初の三字を書き抜きなさい。

問6 傍線部5「市場原理」とありますが、メディアにおける市場原理について述べたものとして、最もふさわしいものを次から選び、記号で答え

なさい。

ア 情報の受け手は、常に客観的な真実を欲してしまうものだということ。
イ メディアが真実を追究するあまり、発信する情報に偏りが生じてしまうこと。

ウ メディアが発信する情報の質と量は、受け手の求めに応じて左右されるということ。

エ メディアと情報の受け手の間に権力者が介入して、情報量のバランスを保とうとすること。

問7 Xに当てはまる一文を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア それはメディア自身である。

イ それは僕であり、あなたである。

ウ それは政治家などの権力者である。

エ それは誰と特定することはできない。

「以下余白」

